

第28回 飯田短期大学学内研究集談会

Part 1 口演・報告

日時：令和6年2月20日(火) 9:00-13:00 会場：飯田短期大学 視聴覚室

プログラム

- 9:00 開会の辞および挨拶
- 9:05 報告：子宮頸がん予防啓発活動の紹介
..... 鈴木真由美
- 9:25 報告：個展，グループ展での作品発表
ものづくりと地域文化 生活科学専攻デザインの取り組み
..... 田中洋江
- 9:45 報告：ICTを活用した食育の事例
..... 富口由紀子
- 10:05 口演：歯科保健活動の効果的なあり方について考察する
..... ○安富和子・羽生里緒奈
- 10:25 報告：わいわいひろばの現状に関する報告～利用者の実態と子育て相談に着目して～
..... ○壬生江美・宮内 愛
- 10:45 報告：食物繊維を多く含む南信州食材の啓発に向けた取り組み
..... ○友竹浩之・塚田和也・林 正樹・高田和子・森しずか
- 11:05 休憩（10分）
- 11:15 報告：「避難計画から避難所生活まで体験してみよう」
令和4年度長野県地域発元気づくり支援金活動 事業報告
..... ○高木一代・鈴木真由美・澤田有香・細田せい子・矢澤玲子
片山直幸・羽生里緒奈・林 正樹・加藤正徳・山田 隆
- 11:35 報告：令和5年度IR報告（抜粋）
..... ○木下幸彦・寺本俊也・三浦弥生
- 11:55 口演・FD：雑誌『現代思想4 特集 カルト化する教育
新教科「公共」・子どもの貧困・学校外教育…』（青土社, 2023年4月号）紹介
..... 奥井現理
- 12:15 報告・FD：食品開発実習における商品開発について
..... ○塚田和也・友竹浩之・千 裕美
- 12:35 口演・SD：キャンパスライフに対するアンケート結果（令和5年度）
..... ○桑原真裕子・吉澤智子・竹村 香・折山正禮
園原康平・渡邊千春・奥井現理・武分祥子
- 12:55 閉会の辞・アンケート記入

Part 2 展 示

日時：令和6年1月25日(木)～2月20日(火) 会場：飯田短期大学本館廊下掲示板

研究ポスター

「避難計画から避難所生活まで体験してみよう」

令和4年度長野県地域発元気づくり支援金活動 事業報告

..... ○高木一代・鈴木真由美・澤田有香・細田せい子・矢澤玲子
片山直幸・羽生里緒奈・林 正樹・加藤正徳・山田 隆

展覧会チラシ，DM，コメントを添えた展示会場の写真

テキスタイルアート 個展・グループ展での作品発表 田中洋江

報 告

子宮頸がん予防啓発活動の紹介

鈴 木 真由美

報告の概要

筆者は2012年より、チーム「愛は子宮を救う」のメンバーとして子宮頸がん予防啓発活動を行っている。チームリーダーの細胞検査士をはじめ、婦人科・小児科の医師、子宮頸がん体験者ほか7人のメンバーから構成され、時には、こてつ(吉本興業：芸能プロダクション)も参加し共に活動をしている。筆者が活動に参加したきっかけは、自身の子宮頸がんの体験にある。

今回は、チームとしての活動と、筆者個人としての活動の概要を紹介する。

チーム「愛は子宮を救う」の活動

①子宮頸がん予防啓発動画「愛は子宮を救う」

撮影、1回/年→YouTubeで配信

＊コロナ禍前は1回/年のイベント

②子宮頸がん予防啓発冊子とポスター「愛は

子宮を救う」発行、1回/年→県内の中学2年生全員と小中高校の保健室(養護教諭)などに配布

③がん教育講師 ＊中学校が主

④企業の研修会の講師

⑤イベント(信州ブレイブウォリアーズ試合など)で生理用品・冊子などの配布

＊本学でも配布 他

個人の活動

がん教育講座：中学・高校生対象

＊2023年度は中学校2校と高校1校で実施

講座の展開：生徒が抱く「がん」のイメージ→がん教育とは→がん体験者としての思い→病と向き合うということ→まとめ

生徒の反応(感想より):「がんの見方が変わった」「母もそんな気持ちだったのか」「どんな

ことがあっても前向きに生きていく」「あの時ワクチンを打っておいてよかった」「ワクチン迷っていたけど親と相談したい」「早期発見・治療が大切」「健康でいられることに感謝したい」「病気になるのも何かの縁」「自分の健康、家族の健康に関心をもって生活したい」

手応え：①生徒の持つ「がん」のイメージが講座の初めと終わりで変化することから、がん教育の目的の第一歩を踏めたと実感する。

②県内の啓発活動は、中信以北は活発だが南信は非常に弱い。

今後：①予防という観点からは病を恐れることは重要だが、病と向き合う姿勢こそが大切であることを伝えていきたい。②南信地域での活動を広げたい。

活動を通して

本活動から学ぶことは、「リスクを考えていたらチャンスを逃す」の一言に尽きる。メンバー個々の得意分野は異なるため、自分一人ではできないことは誰かに助けを求めれば良い。失敗もまたよしとし、次のイベントにつなげる。メンバーの人生観、価値観、お笑いのネタに触れ、お互いリスペクトできることは人としての成長にもつながる。

子宮頸がんの年間死亡者は、交通事故死とほぼ同数です。この数字が小さくなること、がん検診の受診率が大きくなること、願わくばワクチン接種が広まることなど、体験者として願うことは多々あります。今後もチーム・個人としてこの活動を続けたいと思います。

報 告

個展, グループ展での作品発表

田 中 洋 江

概要

今年度制作した作品と展覧会で発表した様子を写真で報告する。

展覧会

1) 展覧会名 「テキスタイルアート・ミニアチュール - 百花百響 -」

会期 2023年7月21日～7月29日

会場 Gallery5610 (青山, 東京)

巡回展 2023年12月5日～10日

会場 金沢21世紀美術館 (金沢, 石川)

内容 繊維を用いた造形表現は、染、織、編、組、縫といった染織の伝統技法をベースに、アーティストの独自技法も加えられ、多様に展開されてきた。この展覧会では、活躍中のアーティスト100名の作品が展示され、会場で互いに響き合い、来場者の心とも響き合った。

2) 展覧会名 「田中洋江 - 川 -」

会期 2023年9月4日～9日

会場 ギャラリー巷房 3階・地下1階・階段下 (銀座, 東京)

内容 麻を使ったインスタレーション。自然光が入る3階スペースには、丸型の連作と中空に吊る作品を展示。地下1階スペースには、天井の高さを活かして細長く伸びる作品を展示。階段下スペースには、丸型の小品を展示。計18点。

まとめ

展覧会では、来場者、アーティストを含め様々な人と交流し、情報交換ができる。また、自ら制作し続けることで得られる成果は大変大きい。これらの経験を実技指導、講義、講座等で学生たちや地域の方々へ還元していきたい。

報 告

ものづくりと地域文化 生活科学専攻デザインの取り組み

田 中 洋 江

概要

本専攻デザイン系学生は、学内外で展示発表することで他者との繋がりをもってきた。令和3年から地域の方々と直接繋がる機会をもてるよう、地域の会社や伝統産業と共同制作し、制作物を地域の祭などで販売している。今年度の活動について報告する。

内容

◆ひさかた和紙 ひさかた和紙の会

1) 下久堅小学校での「和紙染めワークショップ」3月2日 小学生が手漉き和紙で「染」の技法を体験。短大生と交流。木漏れ日、雨粒

を染めよう。

2) 小学生が紙を漉き、学生が模様を染める「和紙の合作」3月2日～3日 手漉き和紙にふれながら、下久堅小学校1年生と短大生が交流。

3) 授業「テキスタイルアート」で、和紙を素材としたミニアチュール作品を制作。下久堅公民館1階ロビーに展示。地元の方はもちろん、いいだ人形劇フェスタにお越しの方へ「ようこそ下久堅公民館へ」という気持ちを込めて。8月2日～10月17日

◆染物会社との共同制作 染物処スミツネ

獅子のモチーフのスマホポーチ、がまぐち、

ペットボトルホルダーのデザイン、縫製 第
16回南信州獅子舞フェスティバルにて販売。
10月15日
成果

学生たちにとって共同制作は緊張と不安が

あったが、取り組み後は自信と誇りを得られていた。小学生に視覚、触覚を使った造形活動、日本の美しい色名を伝えられた。伝統の染物や手漉き和紙について、地域の方々へお知らせできた。

口 演

歯科保健活動の効果的なあり方について考察する

安 富 和 子・羽生里緒奈

1. 背景

学校保健統計における小学生の齲歯の罹患率は、統計を取り始めた昭和23年から令和3年まで疾病異常の1位を占めている。昭和40～50年代は「むし歯の洪水の時代」と言われ、児童の95%以上が齲歯に罹患していた。当時長野県は全国ワースト1の罹患率であった。そのため、長野県衛生部・長野県歯科医師会・学校・行政・地域等が連携して歯科保健活動に取り組んだ。学校では養護教諭が中心となり、学校歯科医とともに歯科保健指導に力を入れ、給食後の歯磨きや様々な歯科保健活動が実施されてきた。その結果、平成7年頃より齲歯罹患率は徐々に減少してきた。発表者は平成13、14年の2年間、駒ヶ根市内のA小学校において、文科省と日本学校歯科医会共催の「歯・口の健康づくり推進指定校」を受け、全職員で歯科保健活動に取り組み、歯の健康及び、咀嚼の指導に注目し、様々な楽しい活動を計画実施した。

2. 目的

発表者は養護教諭として駒ヶ根市のA小学校に平成13年～19年の7年間勤務し、歯科保健活動に取り組んだ。7年間取り組んだ歯科保健活動の成果は、20年たって、成人した卒業生（現在23～30歳）たちに、どのように身についているのか疑問に思いアンケート調査を実施した。本研究では、歯科保健活動の

成果について知ることで、養護教諭の行う歯科保健活動の効果的な在り方について検討することを目的とした。

3. 方法

2022年2月から3月末の間に、A小学校卒業後15年～20年たった卒業生6名に、発表者がアンケートを依頼し、依頼された人が更にその友人にメールやライン等でアンケートを依頼し、それを回収し集計した。

調査内容は、小学校の時にに行った歯科保健活動で、現在最も印象的に覚えていること及び、現在歯について心がけていることや気をつけていることの2点とし、自由記述にて回答を求めた。

4. 結果

駒ヶ根市のA小学校を卒業して15～20年後、現在23～30歳の男女27名から回答を得た。

小学校の時にに行った歯科保健活動で、現在最も印象的に覚えていることは、多い順に、8020ダンスと歌・8020の言葉が最も多く、次にかみかみセンサー、カラーテスター、一口目を30回噛む、卑弥呼の歯がいーぜ、ザラザラチェック、オレオを食べての指導、ガムによる記憶力ゲーム、歯みがき指導、歯のキャラクターハッピーマンとミューちゃん、歯みがきカレンダー、口腔細菌の観察等であった。また、現在歯について心がけていることや気

をつけていることは、歯みがきが81%と最も多く、次いで歯科定期検診52%、よく噛んで食べるが19%、その他が14%であった。

5. 考察

小学校を卒業後15～20年たった現在も印象深く覚えている歯科保健活動は、ダンスや歌のように、体を動かし何かを行うという体験活動と、8020・一口目を30回噛む・卑弥呼の歯がいーぜ・ザラザラチェック・ハッピーマンとミューちゃん等のキャッチコピーが、印象深く覚えられていたことから、体験とキャッチコピーが歯科保健活動の効果を高めるのではないと思う。また、大人になっても、歯みがき、歯科定期検診、咀嚼の意識が

高いことから、小学校で行う歯科保健活動は極めて重要であると思われる。

6. まとめ

これらのアンケート結果は、小学生における効果的な歯科保健活動の在り方について、検討する時の参考となるものと思われる。また、子供の頃の歯科保健活動の学びが、大人になっても活かされ身についていることが分かったことは、指導者の励みとなり、今後の活動や指導に活かされていくものと思われる。

更に今後は、咀嚼の意識を高める印象深く効果的なキャッチコピーを考え、咀嚼の啓発活動につなげていきたいと思う。

報 告

わいわいひろばの現状に関する報告

～利用者の実態と子育て相談に着目して～

壬 生 江 美・宮 内 愛

1. 目的

「わいわいひろば」は、2010年7月に開館し、現在13年が経過した。この間、利用組数、年齢別利用者数の変化、相談件数の増加など様々な変化が生じている。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大により利用制限が行われた2020年度からは利用状況や相談データが大きく変化している。そこで、2019年4月から2023年12月までの利用状況と子育て相談データを整理し、今後の支援内容や対応を検討した。

2. 方法

2019年4月から2023年12月までのわいわいひろばにおける年度別利用組数、年齢別利用者数、相談件数、相談内容について集計し、担当者間で今後の支援内容について検討した。

3. 結果

(1) 年度別利用組数

2019年度：4627組 2020年度：1642組
2021年度：1784組 2022年度：1757組
2023年度（12月現在）：2507組

(2) 年齢別利用者数の推移

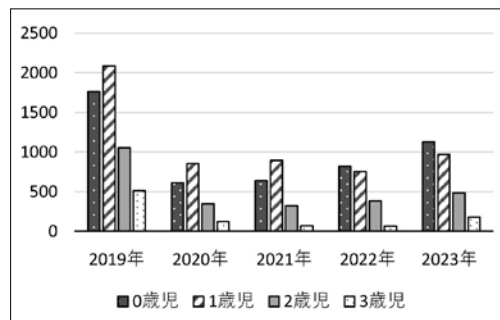


図1 年齢別利用者数の推移
※2023年は12月現在の数

(3) 相談件数の推移

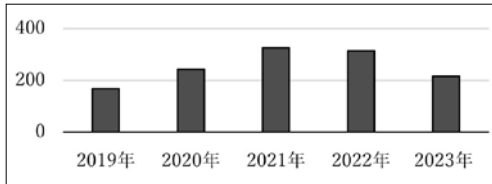


図2 相談件数の推移
※2023年は12月現在の数

(4) 相談内容

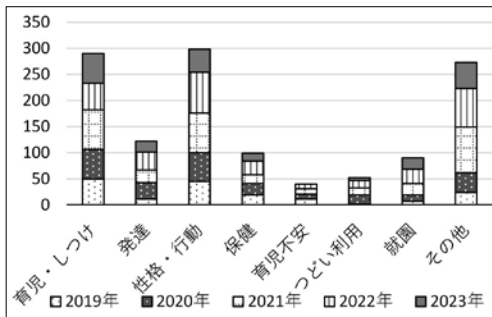


図3 2019年～2023年度12月までの相談内容

4. 結果の考察と今後の支援

①コロナ禍で利用組数が減少したが、相談件数は大幅に増加した。その一因として、アドバイザーが利用者に関わる時間が増え、両者の間で会話が増えたこと等が相談件数の増加

につながったと考えられる。

⇒アドバイザーの職務内容を見直し、利用者に関わる時間を確保することで利用者支援の体制を強化していく。

②基本的な生活習慣が含まれる「育児・しつけ」と「性格や行動の問題」に関する相談が最も多く、「就園」「つどい利用」については増加傾向にある。コロナ禍で、同年齢の子ども達が遊ぶ機会や保護者同士の接する機会の減少により、子育てについて不安を感じる保護者が増加した。

⇒子どもの発達年齢に応じて利用者が相互交流できる場をつくる。現在行われている講習会をより利用者のニーズに沿った内容となるよう再検討していく。「就園」については、保育所での生活がイメージでき、就園の手続きなどの情報を得ることができるよう講習会を計画していく。

③0・1歳児の利用が全体の7割を占めている。

⇒「寝返り」「這い這い」「つかまり立ち」等、利用者の発達年齢に合わせて、それぞれの子ども達が安心して遊ぶことができる環境づくりを継続していく。

報 告

「避難計画から避難所生活まで体験してみよう」

令和4年度長野県地域発元気づくり支援金活動 事業報告

高 木 一 代・鈴木真由美・澤 田 有 香・細田せい子・矢澤 玲 子・
片 山 直 幸*・羽生里緒奈・林 正 樹・加 藤 正 徳・山 田 隆

*新潟医療福祉大学

<目的>

令和3年、台風ではなく集中豪雨などで土砂災害が起こるなどの自然災害を身近に経験した。これらの経験から、「いつ」、「どのような状況になったときに」、「どのように避難するのか」を平時から考えておく必要性を強く感じた。そこで「避難所の生活スペース体験」、「健康二次被害の予防方法」、「災害時の食事をどのように確保するか」という発災後の視点に「わが家の避難計画・マイタイムラインの作成」を加えて発災前の避難計画から発災後の避難所体験までを実施し、平時からの取り組みの大切さを知り、さらなる地域防災力の向上を目指すことを目的とした。

<方法・結果>

- ①マイタイムラインの作成により、防災マップで自宅や会社、学校周辺の危険箇所の確認や警戒レベルと気象情報の関係を伝える事により、発災前からどのように何処へ避難するのかを平時から考えるきっかけをつくった。
- ②発災後、避難所で生活するためのスペースとして室内テントと簡易ベッドの設置および撤去を3～4人グループで協力しておこない、共助の大切さを感じてもらった。
- ③最小限の水で口腔ケアをする方法、正しい手指消毒の仕方、エコノミー症候群を防ぐための弾性ストッキングの履き方などを実際に体験してもらい、健康二次被害予防の意識を高めた。
- ④家庭にある食材を利用して、最小限の水で、簡単に温かい食事を作れる方法としてパック

クッキングを体験し、備蓄する食料や水、停電時の調理器具への関心を高めた。耐熱性のポリ袋に食材を入れ、湯煎で調理する方法（パッククッキング）を用いた。食材を切る場合は包丁の代わりにスケッパーを包装された上から押しあてて切る、出来上がったものも、調理したポリ袋の上からスケッパーを押しあてて切るなど、直接食品に触れない衛生管理の大切さを伝えた。

<実施事業一覧>

- ・令和4年7月24日
喬木村社会教育委員会「防災・地域探検ツアーへ行こう！」参加者37名（子供23名、大人14名）、スタッフ4名、学生スタッフ5名
実施内容：災害時の食事
- ・令和4年8月11日、12日
飯田短期大学「避難所体験 見て・聞いて・触れて 災害に備えよう！」参加者22名、スタッフ20名、学生スタッフ10名 実施内容：マイタイムライン、避難所用テントの設置、健康二次被害予防、災害時の食事
- ・令和4年8月22日
飯田市立西中学校1年生 参加者約80名（教職員含む）、スタッフ6名、学生スタッフ4名
実施内容：災害時の食事
- ・令和5年3月4日
松尾自治振興センター 飯田市松尾地区防災訓練 参加者約60名、スタッフ10名、学生スタッフ8名 実施内容：避難所用テントの設置、健康二次被害予防、災害時の食事

報 告

令和5年度IR報告（抜粋）

木下 幸彦・寺本 俊也・三浦 弥生

はじめに

大学におけるIR（Institutional Research）とは「一般に、教育、研究、財務等に関する大学の活動についてのデータを収集・分析し、大学の意思決定を支援するための調査研究を指す」と定義¹⁾されており、本学でも令和4年度より法人本部に組織し、その活動を行っている。ここでは本学IRが令和5年度に行った分析結果の一部を報告する。

1. 学修環境の満足度と成績

学修環境の満足度を「令和4年度キャンパスライフに対するアンケート（令和5年1月実施：回答者数350名）」44項目の結果から得た満足度、成績を回答のあった350名の「令和4年度通算GPA」とし、GPA中央値2.85であることから成績高値群をGPA2.85以上、低値群を2.85未満として成績高値群と低値群別で学修時環境の満足度を比較した。 χ^2 検定で有意差（有意水準5%）を認めた項目は、「講義室の設備が整っている」「体育館の整備が充実している」「キャンパスにはくつろげる空間がある」等であり、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した学生はいずれも成績高値群が低値群より低く、成績が高い学生の方が学修環境の満足度が低い傾向にあった。

2. 学修時間と成績

学修時間を「令和4年度後期学修時間調査（令和5年1月実施 回答者数196名）」の結果から得た学修時間、成績を回答のある学生196名の「令和4年度通算GPA」とし、GPA中央値2.9であることから成績高値群をGPA2.9以上、低値群を2.9未満とし、成績高値群と低値群別で学修時間を比較した。その結果、普通

日の1時間以下の学修時間において、平日では成績高値群60.0%、低値群41.7%であり、休日では成績高値群51.0%、低値群28.1%といずれも成績高値群が低値群に比して高く、成績が高い学生は普段から1時間程度の学修を行っている者が多い傾向にあった。

3. 学生の生活の充実度等

大学・短期大学基準協会に委託実施している「短期大学生調査(Tandaiseichousa)」(2023年度調査：令和5年11月実施（回答者数250名）・2022年度調査：令和4年11月実施（回答者数176名）)の結果より、「学生生活の充実度」「他へ勧められるか」について志望別、姉妹校、入試区分別の比較を行った。その結果、「生活の充実度」については大きな差は見られなかったが、「他に勧められるか」については、各区分において差が見られた

4. 地域貢献

令和2～4年度の就職者数は578名であり、その内飯田下伊那地区に就職した学生は289名で全体の50.0%であった。地域を支える人材として、年間凡そ100名を地元へ輩出している。

おわりに

今後も学内外にあるさまざまなデータをもとに種々の角度から分析を行っていきたい。また、その結果を本学にある部署及び委員会等に提示し、以て本学が教育、研究、財務等に関する意思決定を効果的に行ううえでの役割を果たしていききたい。

註1)「大学のガバナンス改革の推進について」審議まとめ（大学分科会注釈22）平成26年2月12日より引用した

口 演

雑誌『現代思想4 特集 カルト化する教育 新教科「公共」・子どもの貧困・学校外教育…』（青土社、2023年4月号）紹介

奥 井 現 理

はじめに

本発表は、現代の学校教育やその周辺で何が話題になっているのかを学内で共有することを目的としている。『雑誌』には特集記事として討議（対談）記事一本、「現場のリアル」として論文記事三本、「〈育てる〉を問い直す」として論文記事五本、「教室の外には」として論文記事四本、「労働をめぐって」として論文記事三本が掲載されている。このほかに連載記事が三本、「研究手帖」が一本掲載されているが、これらは紹介から省くものとする。

1. 討議・「新自由主義再編下の宗教とイデオロギー」（大内裕和・三宅芳夫）

2. 現場のリアル

「性的マイノリティの若者の学校体験とその後」（杉田真衣）

「教育と市場、ときどき身体 「新自由主義」批判を超えて」（矢野利裕）

「先生、わたしたちは主体的なのですか？自由なのですか？それとも 生権力に統治される学校と新自由主義的学校化」（岡崎勝）

3. 〈育てる〉を問い直す

「選抜構造論からみた日本の教育 日本で入試の公平性が重要となる社会学的理由」（中村高康）

「自覚的な「客分」を育む主権者教育の方へ 新教科「公共」の性格をめぐる覚書」（和田悠）

「哲学はどのような意味で現代日本の学校教育に求められているのか 「方法論」としての哲学と、「知識」としての哲学」（土屋陽介）

「理科離れ再考 ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンの視点から」（加納圭）

「キャリア教育は「未来の可能性領域」とどう関わるか？ 「庭づくり」のメタファーから考える」（土元鉄平）

4. 教室の外には

「児童養護施設と「教育」をめぐる問題」（三品拓人）

「おもちゃ箱としての「居場所」に投げ入れられているものはなにか？」（阿比留久美）

「コロナ禍と教育 生活困難層調査が浮き彫りにする課題」（山田哲也）

5. 労働をめぐって

「保育労働の現在 新自由主義的保育政策とその帰結」（袁輪明子）

「「忙しくない」を考える 教師の多忙化論の先へ」（野村駿+菊地原守）

「給特法下の「禅問答」に終止符を 二つの判例から考える制度の矛盾と現場の力」（赤田圭亮）

おわりに

以上五節、十六本の記事を紹介した。全編にわたって目立つのは「新自由主義」というワードであって、「新自由主義」によって学校教育等が苦境に追い込まれているという主張である。それが「カルト化」なのであろうか。テーマが先行し各記事がそれに応えていない、そもそもテーマの設定に無理があったと言わざるを得ない。

その一方で、土屋の論文記事は「新自由主義」批判とは距離を置き、知識軽視・応用力重視の危険を指摘するものであった。「カルト化」とは若干種を異にする感があるものの、その危険性は現代日本においてこそ大いに啓発・共有されるべきものである。中村の論文記事が指摘する入試の公平性危機とそれがも

たらず社会危機も同種のものであって、これらは他の記事とは趣を異にする、まさに白眉といえよう。

「主体性」を形成するために主体的な学習活動をさせるべきであると考える安易な言説が幅を利かせる学校教育の世界にあって、その「主体性」が引き起こす課題を指摘しているという点で、山田の考察も注目に値する。安易な発想で行われる教育活動では、単純化

された「主体的でなければならない」という規範だけが伝達され、その内実は主体たるに求められる資質能力の形成に成功していないのでは、教育が弱者再生産に加担していることになりかねないという危機を鋭く指摘している。

他に、阿比留の記事が「支援」界隈の思考停止状態を指摘するもので、大いに省察させられるものであったことを付記しておく。

口 演

キャンパスライフに対するアンケート結果（令和5年度）

桑原真裕子・吉澤 智子・竹村 香・折山正禮・
園原康平・渡邊千春・奥井現理・武分祥子

1. 目的

本学学生の学生生活に対する満足度を調査することにより、短期大学職員のあり方を見直し、業務改善及び施設設備の充実を図る一助とする。

2. 調査方法

- (1) アンケート調査
- (2) 対象：本学に在籍する全学生（悉皆調査）
- (3) 調査期間：令和6年1月17日～24日
- (4) 調査内容：質問項目は、対象者の属性、サポート体制、教育施設・設備について
- (5) データ収集方法：オクレンジャーによるアンケート内容の送信と各自入力後の返信
- (6) 分析方法：単純集計（オクレンジャー）

3. 結果

対象者数431人中回収数260（回収率60.3%）

- (1) サポート体制 *（ ）内は令和4年度

履修登録や単位取得について相談できる体制については、94.2（92.4）%が整っていると回答した。休講などの連絡が学生にわかりやすく情報提供されているかについては、86.2（76.6）%が提供されていると回答した。今年度導入したUNIPA利用状況については、利用しているが75.4%，利用していないが23.9%，見方がわからないが0.8%であった。学生便覧を活用しているかについては、60.4（65.4%）が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。

学生生活について相談できる体制については、87.3（87.9）%が整っていると回答した。奨学金制度などの経済的サポート体制については90.4（93.0）%が整っていると回答した。からだやこころの健康について相談できる環境があるかについては、「からだ」が83.1%，

「こころ」が利用者において84.7%であった。進路・就職サポート体制について、全般的に満足しているかについては、91.9 (94.4) %が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。職員の対応に満足しているかについては、全体として、当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した者が9割以上であった。個々の教職員対応への記述もあった。

(2) 教育施設・設備

講義室・実習室等の教育施設について全般的に満足しているかについては、91.9 (89.3) %が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。自習スペースについては、十分と回答した者は74.6 (65.9) %、くつろげる空間では77.3%であった。食堂や売店の充実に関しては利用者の9割以上に肯定的な回答がみられた。教室の空調の効きでは、十分と回答した者は76.5 (79.2) %であった。駐車場については、利用者の利用しやすさを見ると、当てはまる・どちらかといえは当てはま

るが72.3%であった。

4. 考察

回答率が減少した点が悩ましく、来年度に向けて実施方法の検討が必要である。

(1) サポート体制

履修、学生生活、健康のサポート体制は比較的整っている。こころのサポートについては利用状況を確認したい。学生便覧の活用については、前年度より下がっており、引き続き活用する方法について検討する必要がある。教職員の対応については、個々の対応を今一度確認し、さらなる向上を目指したい。

(2) 教育施設・設備

自習スペースの確保は伸びているがくつろげる空間と合わせて学生が使用できる場所の検討を重ねたい。空調、駐車場の整備は前年度に引き続き対応を進めていく。

5. まとめ

ここで得られた結果を各部署で共有し、連携の下で検討及び改善し、学生の教育環境を整えていくように取り組みたい。